

Microsoft Teams の 「音読の練習」機能を利用した 外国語授業

三 澤 真

1 言語習得と音読

言語習得に音読は広く活用されている。しかし、授業で効果を上げることは簡単ではない。指導方法が確立しておらず、学習者へのフィードバックを行うこともむずかしい。学習者側にも意欲や羞恥心の問題がある。何よりも時間的制約が大きい。

本報告は、Microsoft 社の Teams for Education に実装されている機能「音読の練習 (Reading Progress)」機能 (以下「音読の練習」) が上記の問題の多くを解決するツールであることを示し、実践方法を紹介するものである。学習者が自分の発音を聞くことを目的とした装置・学校施設に LL 教室があった。しかしこの高価な施設がひろく有効活用されることはなかった。この点には「(LL 機器への) 過度の依存」と「機器を使いこなす方法、教授法上の know how がほとんどなかった」という「二つの面での基本的な誤り (吉島・境, 2003)」が指摘されており、マルチメディア再生機能を備えネットワーク接続が可能な CALL 教室においてもこの問題が解消されているとはいいいがたい。翻って今日では、スマートフォンやスマートスピーカーの音声操作など、機械に話しかけることが一般化しつつある。アプリや機器を使いこなす素地は、学習者・教師の双方ともに整ってきたといえよう。LL や CALL と違い「音読の練習」は大規模な専用施設を必要としないので、システムへの依存とまらない授業展開も容易である。本報告は外国語授業における音読活動の概要の説明を行うので、Teams の「音読の練習」の実践例を確認したい場合は 4 章をご覧ください。

なお、Teams の設定や操作について本報告では「音読の練習」を中心に行い、Team（授業クラスのこと）の作成・設定やメンバーの追加方法、基本的な利用方法は Microsoft のウェブサイト等に譲ることにする¹。

1.1 効果的な音読の方法

音読と脳の活性化についての様々な議論については本報告では扱わず、外国語習得への寄与について、簡単に触れるにとどめる。

外国語学習における音読トレーニングはリーディング力、リスニング力、表現力、ライティング力の向上に効果があるとされている。つまり、音読が外国語習得のあらゆる技能の向上につながるということになるのだが、後述するように、外国語学習の現場では有効活用されているとはいいがたいのが現状である。

門田（2020）によれば、音読の際には、1. 音韻符号化 2. 文法・意味処理 3. 発音（発声） 4. 聴覚フィードバックの4つの処理が多重に行われるという（音読における多重処理）²。

門田が同書で音読学習の留意点として挙げている10項目をまとめると、下記のようなになる。

1. 文字と音を一致させ、「双方向性」を持たせる
2. 2秒以内の句・節単位に区切ったモデル音声でパラレルリーディングする
3. 意味や状況の事前理解
4. チャンクを意識する
5. 重要な文は、暗唱を目的に、リードアンドルックアップ練習を行う
6. 反復練習で音声処理の自動化を目指す
7. スピーキング能力向上を目的とする場合は、韻律を意識した「プロソディ

¹ <https://www.microsoft.com/microsoft-teams/group-chat-software>

² 門田 39f.

音読」を心掛ける

8. レベルと興味・関心を一致させる
9. 自分の録音を聞きなおす（フィードバック）
10. なりきり音読などで感情を込める

「音読の練習」は従来の音読活動にそのまま導入するだけでも1、6、9の項目に寄与できる。本報告では、2、3、4、7につながる工夫についても紹介する。

2の平行リーディングでは2秒ごとに区切った単位に分けると効果的であるとされているが、これは音韻ループ（音韻的ワーキングメモリ）の制約によるものとされている³。

1.2 音読の方法

発声を伴う言語学習の方法の種類のうち、主なものを確認する。

- 音読（声に出して文字を読むこと）
- 素読（内容の理解は問わずに文字を声に出して読む）
- 平行リーディング（モデル音声を聞いてから、音読する）
- コーラスリーディング（複数名で一斉に音読する）
- シャドウイング（モデル音声を聞きながら、影のようにすぐ後から追いかけるように発音する）
- リピーティング（モデル音声を聞き、ポーズの間に繰り返す）

音読、素読、平行リーディング、コーラスリーディングは文字情報を使うが、シャドウイングとリピーティングは基本的に文字情報なしで行われる。本報告での実践は、学習者に文字情報を与えての練習を主眼としている。

³ 門田 64f.

2 音読の授業利用における諸問題

2.1 時間的制約

音読の授業への活用のもっとも克服困難な障壁である。

効果的な音読に必要な時間的な長さについては本報告では立ち入らないが、仮に一人1分の音読を行うとしても個別に行えば人数分の時間が必要となり、授業時間中に指名して実施することは現実的ではない。コーラスリーディングを行う場合、学習者ごとの取り組みの差を認識することはむずかしく、個別に技術的な助言を与えることは不可能である。

1分程度の音読の宿題に取り組む場合、練習時間を含めても学習者は10分以内で完成・提出できるであろう。しかし教師側には全く別の事情が発生する。人数分の音声を聞き、評価し、点数と助言のコメントをつけるには膨大な時間を要する。その時間と手間が学習者の学習効果と見合うかの検討は行わないが、筆者はこれまでに30秒ほどの音読の録音提出を課す試みを行ったものの、継続できなかった経験があったことはここに記しておく。

時間の捻出という外形的事情だけでも、音読の学習効果を生かす授業運営がいかに困難かは明らかである。

2.2 教師側の質的問題

教師は音読活動の評価と助言の両面においても困難に突き当たる。

声の大きさと話速を図るだけの単純な評価であれば評価者の技量や経験は必要ない。しかし母音と子音の調音、流暢さ、強弱と高低アクセント、長短、休止の長さやタイミングなどの本質的な評価を行うには専門知識と研修が必要である。技能試験であれば個別の受験者に時間をかけることもできるが、日常の集団授業で同じ質を確保することは現実的ではない。

また、評価結果のフィードバックにも問題がある。不適切な発音の箇所を個別に理由をつけて説明することは時間的に不可能である。全体的な印象をコメントして返すことにとどまるとしたら、それが助言としてどれほどの効果があるかは評価が難しい。また発音の誤りを見つけても、端的に短時間で、それも学習意欲

を削がずに助言することは大変難しい。

評価の際はあえて理解と共感の気持ちを抑える必要もある。日常生活では規範的でない発音に接しても、なんとかコミュニケーションを成立させて相互理解に至ることが指向される。一方、音読や発音を評価することは、理解よりも規範との相違を正確に認識することを優先しなければならない、専門的行為である。ネイティブ話者の教師であっても、日本での教授経験や滞在年数を経るにしたがって、カタカナ発音に慣れていくという問題もある。

提出物の質は問わずに、数を評価する方法もある。この場合、小学校低学年の国語の宿題のように、音読の回数と頻度のみが記録されることになる。ただし、母語環境での技能の精緻化とは異なり、この方法では外国語習得にかかわる技術的な助言はほとんど期待できない。また取り組み状況を学習者側が水増しすることも容易であり、教師が不正の確認をすることも簡単ではない。

2.3 学習者側の意欲の問題

学校教育ではさまざまな科目で教科書の音読が行われるが、それに対する児童・生徒の意欲はどのようなものだろうか。指名された生徒が張り切って音読することが理想ではあるが、現実には生徒の音読への意欲は一様ではない。ましてや、外国語のテキストの音読となればなおさらである。テスト向けの短期的な対策にはならず、成績評価での音読の比重も不明瞭と生徒たちが考えているなら、意欲につながりにくいことは必然である。

羞恥心も大きな問題である。外国語の発音は、間違えていても、正確であっても、羞恥心につながることもある。人前で誤りを指摘される恥ずかしさを先取りし、誤りをすること自体に不安を覚える。言語の組み合わせ次第では、外国語をネイティブ話者のように発音することは大変困難である。この場合「間違えない」ことはほぼ不可能である。一方で、正確な発音ができる場合でも、心理的な負担がある。母語の言語音にない音を出すことは、日常生活においては奇異とみなされ、「変な音」としてあざけりの対象とされがちである。同一言語話者同士でさえも、地域の発音と異なることでよそ者のラベルが張られ疎外の対象になるほど

である。外国語での発音練習とこの認識がつながると防衛機制が働き、人前では意図的にカタカナ発音をして外国語学習を妨げてしまうこともある。

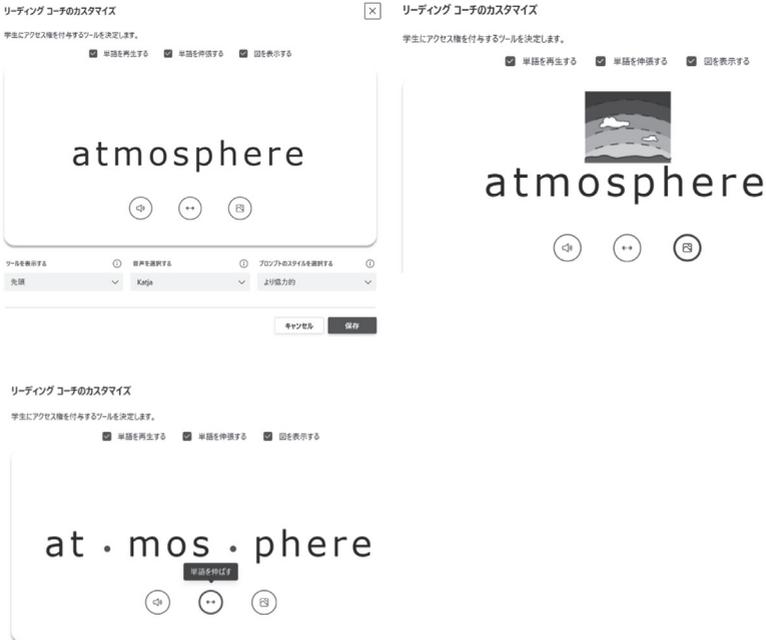
また、発音の矯正とは、調音器官、つまり体の動かし方の変更を求めることである。助言に従って身体運動を調整する能力には個人差がある。失敗の繰り返しと反復される同内容の助言により自己効力感が下がり、学習意欲が低下することもあるだろう。

以上のようなさまざまな要因により、学習者に発音練習を課すことは容易ではない。

3 Teams「音読の練習」の検討

3.1 Teamsの「音読の練習」の長所

3.1.1 リーディングコーチ機能



学習者の課題の取り組みを助ける機能。課題配布時に機能を有効化することで、

学習者は単語の発音、切れ目、イメージ画像を確認できる。内容は自動生成される。

3.1.2 AIによる自動評価（正解率）

提出された音読に対して、「正解率」がパーセント表示される。1分ごとの正解単語数も表示される。学習者も確認できる。

3.1.3 AIによる、評価基準を明示したフィードバック

AIの評価でマイナスとなった語句が5つの理由別に色づけされて、個別に示される（誤発音、挿入、自己修正、省略、繰り返し）。教師側が認識精度の設定を行い、厳密さを切り替えることができる。結果は学習者も確認できる。

3.1.4 個別の取り組み（学習者の羞恥心を回避）

録音・録画はスマートフォン・PC・タブレットなどのデバイスを利用して行い、提出物と評価結果は他の学生・生徒はアクセスできない。学習者は他者の批判的な目を気にせずに取り組むことができる。

3.1.5 場所と時間の制約が非常に少ない

録音・録画は遠隔授業で学生・生徒が使用する一般的な機器を使用し、提出もインターネット経由で行う。そのため、特別な教室を手配する必要もなく、宿題・授業外学修とすることで、学習者は自分の都合に合わせて取り組むことができる。

返却もオンラインで完結するので、教室での授業時間を圧迫することはない。

3.1.6 記録の保存

提出物は評価とともに Teams 上に保存される。忘れたり紛失する危険性は極めて低い。

3.1.7 多言語対応

英語や筆者が担当するドイツ語だけでなく、フランス語、中国語、韓国朝鮮語

など、大学で第二外国語として履修可能な言語の多くでこの機能が使用できる。また日本語でも利用できるので、留学生向けの日本語の授業でも活用が見込める。

3.1.8 不正の防止

Teams for Education には教育機関から賦与された ID でログインする。通常、ID の貸し借りは教育機関で禁止されており、学習者側にとっても、ID とパスワードを他人に知られることはリスクがあまりにも大きい。提出物は録画・録音なので、偽造することは簡単ではない。

3.1.9 マルチプラットフォーム

Teams は Google Chrome などのブラウザ上でも動作するので、PC の機種にかかわらず、同一環境で使用できる。また Microsoft 社は Teams アプリを iOS、Android、Windows、Mac などの各種 OS 向けに配布している。

3.2 Teams「音読の練習」の問題点

3.2.1 機器の設定とネットワークの確保

提出物作成用の機器の設定は学習者が行う。マイクとカメラが Teams アプリ等へアクセスできるようにする必要がある。担当教師は指針を示し、助言をすることはできるが、どうしても想定する動作をしないことがある。そのための代替措置については後述する。

課題提出のためにインターネット回線が必要となるが、家庭用の一般的な回線や大学の無線 LAN であれば問題なく、携帯電話会社の回線でも提出は可能である。

3.2.2 「設定方法がわからないので提出できない」という釈明

機器の状態不良を理由に課題の提出を免れようとする学生も少数ながらいる。課題のアクセス状況は Teams の教師画面に表示されるので、試してみたかどうかは確認できる。目的は音読する機会を設けることなので、代替措置への誘導を

行えば釈明の真偽を問う必要はない。

3.2.3 モデル音声がない

リーディングコーチ機能は単語ごとのモデル音声として機能する。しかし句・節・文レベルでは、後述するように、モデル音声を別途用意することになる。

3.2.4 受講者ビューの機能が限定されている

配布課題を「学習者」として試すことが録音までしかできない。リーディングコーチ機能や AI の評価を課題配布者が試す機能の実現が待たれる。

3.2.5 Teams for Education が必要

「音読の練習」は Microsoft 社の Teams 内の機能だが、教育機関向けエディションの Teams for Education が必要である。個人向けの無料版や一般企業向けのエディションでは使用することができない。筆者は複数の大学で授業を担当しているが、Teams for Education の導入状況や学習管理支援システム (LMS : Learning Management System) としての活用状況は一様でない。利用の容易さ別に紹介すると下記のようなになる。

1. Teams for Education を主たる LMS として利用している。
2. Teams for Education を LMS の一つとして使用でき、利用者の ID が他の学内システムと共通である。
3. Teams for Education を LMS の一つとして使用できるが、利用者の ID は他の学内システムと異なる。
4. Teams for Education は導入されているが、大学の方針として利用できない。
5. Teams は導入されているが、Education 版ではない。
6. Teams が導入されていない。

上記の 4 から 6 の場合、「音読の練習」は使用できない。

1 から 3 では学習者と教師の Teams への接触頻度と習熟度の差につながるが、初回授業での動作確認や操作説明の動画の紹介をすることで、その差はすぐに解消することができる。Teams の使用方針に応じた利便性関連の設定については、章を改めて説明する。

3.2.6 サーバーダウン

Microsoft 社の Teams 用サーバーがダウンすると、「音読の練習」は使用できない。課題提出期限日・課題の配布日・授業実施日にこの問題が発生した場合は、提出期限日を変更するなどの措置を取ることで対応する。なお Teams は国内外で多くの企業が利用しているので、問題の発生や経過は報道や SNS で確認することができることが多い。

3.3 短所をカバーする方法

3.3.1 事前指示（機器設定の問題）

- 指示 1（アプリのインストール）：初回授業までにスマートフォンに Teams アプリをインストールするよう努め、アプリがない場合は授業中に指示する旨をシラバス等に記載しておく。
- 指示 2（紹介動画の視聴）：Microsoft 社の「音読の練習」公式紹介動画へのリンクを共有し、授業開始前に視聴するよう、LMS 等で指示しておく。

3.3.2 初回授業（機器の設定と操作の問題）

- グループ分け（スマートフォン種類別）：所持しているスマートフォンの OS 別にクラスを分け、おなじスマートフォン OS 同士で 4 人 1 組程度のグループを作り、班内で自己紹介させる。
- デバイス設定のノウハウ共有：操作や設定で困ったら、まずは班内で意見交換するよう、指示する。
- 初回の「音読の練習」の課題開始：カメラとマイクへのアクセスを許可する設定がスマートフォンから要求されるので、「許可する」を選択させる。初

回課題は動作確認が目的なので、日本語（第1言語）の音読素材を使用する。

- 動作しなかったメンバーの確認：名簿やアンケートフォームに記録しておく。時間を置く、自宅のPCでも試す、などの指示を出す。
- 代替フォームの紹介：後述する代替フォームへのリンクを紹介し、動作しなかった場合の提出手段とするよう指示する。

3.3.3 授業ごとの対策（モデル音声の問題）

- Word ファイルの配布とイマーシブリーダーの案内：モデル音声の生成手段とする。詳細は後述する。
- 教師の読み上げ音声：モデル音声の配布。詳細は後述する。

4 Teams「音読の練習」の授業での利用

4.1 授業内小テストとの組み合わせ

4.1.1 小テストの種類と形式

「音読の練習」を宿題・授業外学修で使用する場合、教室での授業と連動させることで効果を高めることができる。ここでは Teams を利用した授業内小テストの例を示す。この提案は「音読の練習」との連携が主眼であり、小テストとしての難易度の確保は想定していない。

Teams には「音読の練習」以外に、オンライン小テストを実施できる「課題」機能がある。毎回の授業にこの機能を利用することで、学習者は ID を管理し Teams へアクセスする習慣を持つようになる。なお、Teams 用小テストの作成には Microsoft のオンラインアプリ「Forms」のクイズ作成機能を使用する。Teams を使用できる教育機関であれば、こちらも利用できる。

「音読の練習」と連動する小テストの形式と内容として、下記の組み合わせが考えられる。

- 語彙テスト（選択式）
- 文法テスト（主語と述語動詞の選択）

- リスニング兼文法テスト (チャンキング)
- リスニング兼語彙テスト (入力式)

授業の方針に合わせて問題数や組み合わせの調整が必要である。それぞれの意図や目的は次のとおりである。

4.1.2 語彙テスト (選択式) : 内容理解

Microsoft Forms では、マッチング形式のクイズは作成できない。4つの語彙を4問の4択問題に分けることもできるが、画面の専有面積が大きくなり、マッチング問題特有の消去法(組み合わせ済みの選択肢を除外して考える)ができず、手軽さ・手早さで劣ることになる。代替措置として「ランキング」モードで作問すれば、疑似的にマッチング問題を作成することができる。この場合、部分点を設定することはできない。初見の語彙を減らすことが目的なので、難易度を上げる必要はない。

4.1.3 語彙テスト (入力式) : 正しいスペルの意識づけ

設問ごとに教師のモデル音声にあわせて数回リピート形式で発音を行い、その後所定欄に解答を入力する。内容は単語・語句・短文など、短いものにする。目標言語の「発音とつづりの規則」の意識づけを目的とし、英語やローマ字とは異なる規則を持つ語彙の出題が望ましい。

4.1.4 文法テスト : 日本語との構造的な差異への注意喚起、読解力と作文力の育成

複数選択形式を使用し、文中の主語と述語動詞を選択する問題。システムの制約により、選択肢に「主語」と「述語動詞」の区別はない。

日本語は「主語と動詞」は必ずしも明示しない。本練習によって、主語と述語動詞を意識する習慣をつける。また、品詞としての「動詞」と、文中の役割としての「動詞(述語動詞)」を区別する訓練でもある。対象言語の文法によっては、この設問は適していない場合もある。

Microsoft Forms では、グリッド形式のクイズ出題ができない。Google Form であれば、主語・述語動詞・直接目的語を指定しての出題をすることができる。

4.2 宿題・授業外学修

4.2.1 二つのモデル音声

4.2.1.1 イマーシブリーダーと Word ファイルの配布

イマーシブリーダーとは、Microsoft 製品に広く搭載されている音声読み上げ機能である。Teams や Forms、Microsoft Edge ブラウザなどでも利用できるのも、Word ファイルを配布する必要は必ずしもない。しかし「音読の練習」用の課題原稿は Word で作成するので、そのまま配布することはそれほど手間ではない。

イマーシブリーダーでの音声読み上げ機能の品質は、規範的な調音と強弱・高低アクセント、コンマやピリオドなどでのポーズについては、モデル音声として十分な品質に達しているように思える。学習者にはイマーシブリーダーの起動と話速・性別の設定方法を示し、リスニング練習と調音の確認に使用するよう、指示する。

4.2.1.2 教師によるリピーティング練習用録音データ（非母語話者を含む）

イマーシブリーダーには、記事執筆時点では句・節単位で区切った読み上げ機能は搭載されていない。音声の録音・編集装置などを利用して作成することも技術的には可能だが、手間と時間がかかりすぎる。スマートフォンや PC で教師が適宜区切りを入れた音読を行い、それを録音・配布する方法が現実的である。

音読の際は 2 秒以内の句・節の区切れごとに休止を入れるよう心掛け、音読練習が記憶につながるよう誘導する。この音源は、課題提出前のリピート発音練習に使用するよう、指示する。教室での授業で、この音読をコーラスリーディングしてもよい。

配布する音声データの吹き込みが母語話者によるものでなくてもよい。多くの日本人教師をはじめとする非母語話者にとって、母音・子音といった調音や日本語話者の苦手とする強弱アクセントの区別を備えた音読音源を吹き込むことは簡

単ではない。しかし、適切な句・節単位での区切りや緩急、高低アクセントをつけることは十分可能である。むしろ日本語母語話者がターゲット言語で発話する際に行うべき工夫を示すことには向いている⁴。

4.2.2 Teams「音読の練習」の代替課題

Microsoft Forms を使用し、「ファイルを添付」機能から動画データを提出できる「フォーム」を作成しておく。

フォームには氏名、授業の曜限、授業実施日、音読課題の題名を入力できるようにしておくこと確認の際に便利である。

不正防止のため、提出する動画は、提出者の顔が見えるように撮影するよう指示する。顔全体を撮影したくない場合は、口元が映っていれば可としてもよい。

筆者は、代替の提出物の評価やコメントは行わず、提出点のみ加算としており、その旨はフォームにも明記してある。

4.3 「音読の練習」の使用手順（基本編）

- **Word ファイルの読み上げ原稿を作成（内容は単一言語）**：音読するテキストだけの内容にする。指示やコメントが入っていると「音読の練習」にインポートしたときに編集・調整が必要となる。複数の言語を混在したテキストを「音読の練習」に使用することはできない。
- **OneDrive に保存**：教材を配布する教育機関の OneDrive に、ブラウザ経由でドラッグアンドドロップなどの操作で、上記ファイルを保存する。
- **Teams の「課題」機能**：対象クラスのチーム画面の「課題」を選択→「作成」をクリック→「課題」を選択→「添付」をクリック→「音読の練習」を選択
- **原稿選択**：OneDrive から目的の読み上げ原稿を選択する。

⁴ 吉島・境(2003)が「文アクセントやイントネーションが単音の正確な発音より重要(p.182)」と指摘していることから、非母語話者も発音の手本となりうる。

- **内容確認と設定**：認識感度などの設定を行う。「ビデオが必須」以外の設定は初期設定のままでよい。
- **「ビデオが必須」の設定**：音声のみが必要であれば、オフにする。対面授業で利用する場合は声で本人確認できるため、ビデオは不要である。
- **リーディングコーチ機能**：宿題・授業外学修であれば有効にする。この機能で語彙と発音の確認ができることを案内するとよい。実技試験として利用する場合は無効化することも検討する。
- **「受講者ビュー」による動作確認**：必要があれば、動作確認を行う。受講者ビューによる確認画面では文字や画面の設定変更やレコーディングの動作確認ができる。一時的に録音・録画されるが、サーバーには保存されず、評価を受けることができない。リーディングコーチ機能も試すことができない。
- **課題機能の設定と配布**：課題名、提出締め切り日の設定を行い、配布する。配布日時はスケジュール設定もできる。
- **その他の設定**：必要に応じて、タグと点数の設定、チャンネルの選択を行う（応用編を参照）。

以上で、「音読の練習」を実施することができる。

学習者が提出すると集計画面の「状態」欄に表示され、「提出済み」の文字をクリックすると数秒で AI による評価が表示される。

教師が返却処理をすると、提出者は AI の評価を確認できる。この仕組みの制約があるので、教師が返却処理の操作をすることは非常に重要である。評価のマ



イナスとなる項目は下記の5つである。

- 誤発音：発音に誤りがある。画面には、吹き込んだ音声をもとに音声認識された単語が表示される。
- 挿入：原文にない語句が挿入されている。
- 自己修正：一度誤って発音したのち、もう一度発音した語。
- 省略：原文にある語句が発音されていない。吹き込み音声の声の小さい場合など。
- 繰り返し：同一語句を繰り返してしまっている箇所。

画面中の語句をクリックすると、その箇所からの録音・録画が再生されるので、マイナス評価であった自分の音声を確認することが容易である。教師側も同じ操作ができる。

教師は、返却時にコメントをつけることができる。筆者は判定をすべてAIにゆだねているため、正解率が100%の提出物にだけ、祝福のコメントをつけている。正解率に応じて決まった顔文字や絵文字を返すだけなら、時間や労力はそれほどでもないだろう。

宿題・授業外学修とした場合は、その次の授業中に、各自で返却されたAIの評価を確認する時間を設けるなど、自己確認の機会を確保するとよい。

The screenshot displays a user interface for a language learning application. At the top, it shows the student's name (提出者名) and a progress indicator (試行回数 2, 単語 34, Insights). Below this is a playback control for the student's audio recording (0:00 / 0:47) and a volume slider. A progress bar indicates the recognition status (学習の認識進捗) is '中' (In Progress). A button prompts the student to '学生に完全なレポートを送る' (Send a complete report to the student).

The main section displays the student's performance: 42 words (42単語の正解率), a 97% accuracy rate (97%正解率), and 5 words that were not recognized (5認識済み単語). A legend identifies the error types: 誤発音 (Mispronunciation), 挿入 (Insertion), 自己修正 (Self-correction), 省略 (Omission), and 繰り返し (Repetition).

The student's submission text is:

Guten Tag, Herr Scholz!

Ich heiße Anna Huber.

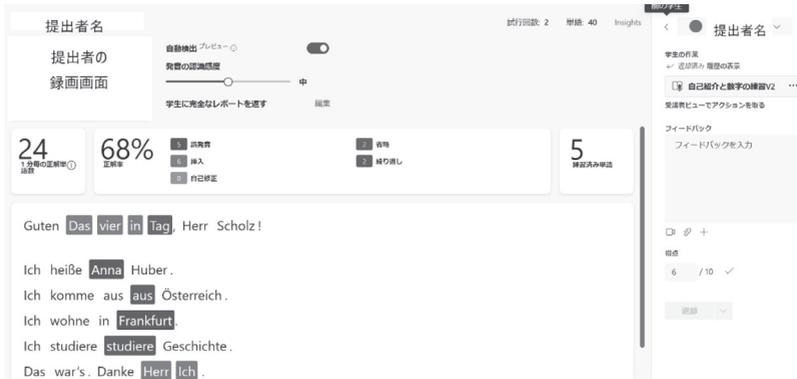
Ich komme aus Österreich.

Ich wohne in Frankfurt.

Ich studiere Geschichte.

Das war's. Danke.

On the right side, the teacher's interface is visible, showing the student's name (提出者名) and options for providing feedback (フィードバック) and a thumbs-up/down rating (9 / 10).



4.4 「音読の練習」の使用手順（応用編）

「音読の練習」の弱点を補ったり、効率的な集計作業をするには、以下のよう
に設定することができる。

- **Word ファイルの配布準備**：OneDrive に保存した Word ファイルの共有設定を適切なものに変更する。
- **モデル音声の配布準備**：チャンクで区切った音読音声データを OneDrive に保存し、共有設定を変更する。
- **Teams の「課題」へのリンク設置**：Word ファイルと音声データへのリンクを設置する。
- **チャネルの選択**：課題配布の通知を行うチャネルを設定する。授業回ごとや課題の種類別にチャネルを設置している場合は、目的に合わせたチャネルを選択する。課題配布後に変更することはできないので、課題配布準備の最初に設定するとよい。
- **タグの設置**：音読以外の小テストも Teams 上で行っている場合は、課題の種類に応じてタグをつけておくと分類しやすい。筆者は「音読」「小テスト」「宿題」「定期試験」などのタグを使用している。
- **配点の設定**：初期値は配点なしで提出の有無だけが記録されるが、ここに数

値を入力しておく、評価を点数として記録し、提出者にもその点数を返すことができる。筆者は配点を100点と設定し、正解率の数字をそのまま入力するようにしている。履修者にもこの基準は示してある。

5 今後の展望

Microsoft Teams for Education の「音読の練習」が外国語の授業運営に役立つことは間違いない。この機能と活動の最大の弱点は、人との直接的なかわりがないことである。

コロナ禍の遠隔授業を経て、大学の授業の多くは対面授業に戻りつつある。授業形態と学習効果については今後さまざまな研究がなされていくであろう。「音読の練習」は遠隔授業に有用であるだけでなく、対面授業を活性化させる潜在能力がある。「音読の練習」を使用して授業外で練習したものを教室で披露する流れを作り、発話への気おくれが低減できれば、従来型の授業で行われてきたさまざまな練習方法も活性化するだろう。コーラスリーディングやリードアンドルックアップ、個別指名による音読やペア・グループでのロールプレイなどにも学習者は気楽に取り組むことになり、ネイティブ教師との授業でも物おじしなくなることが期待できる。

今後も学習ツールは発展し、さまざまな製品やサービスが展開されていくことだろう。

音声認識や自動翻訳システムの競争と発展は著しい。「音読の練習」のように、それが学習ツールに応用される試みは今後も増えていくことが予想される。その時は音読が効果的に組み込まれているかを見極めながら積極的に活用していくことが、われわれ外国語教員の責務であろう。

参考文献一覧

- 門田修平 (2020) 『音読で外国語が話せるようになる科学 科学的に正しい音読トレーニングの理論と実践』 SBクリエイティブ
- 吉島茂・境一三 (2003) 『ドイツ語教授法 科学的基盤づくりと実践に向けての課題』 三修社